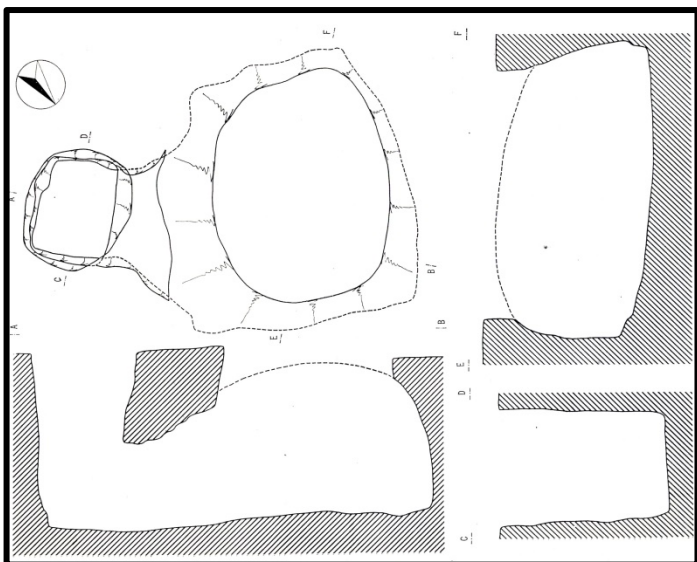


清瀬の中世

清瀬に関連する記録が現れるのは、室町時代の文明12年（1480）に修験道の1つである京都の本山派修験ほうがんけいじょうほっきょうかいけいの法眼慶乗・法橋快継が、武州大塚の十玉坊を「多摩郡清戸の年行事職」に任命するという古文書からとされています。

その後、安土・桃山時代になり、清瀬市一帯は北条氏による勢力下に置かれます。特に北条氏照は、埼玉県所沢市に所在する滝の城を重要な拠点の1つと考え、番所を置き、三田氏・師岡氏に輪番で警護させる清戸三番衆状を永禄7年（1564）に出しています。この番所は、「清戸」という地名から現在の下宿地域を示す説、下宿地域と滝の城を含んだ一帯を示す説などがあり、現在の所ははっきりとしていません。

市内には、この時代の様子を知ることが出来る古文書などは見つかっていませんが、清戸下宿遺跡（現、下宿2・3丁目）下宿内山遺跡（現、下宿3丁目）の発掘調査によって15～16世紀頃の井戸や貯蔵施設と考えられている地下式坑が見つかっています。



清戸下宿遺跡 地下式坑



清瀬の板碑

中世の文献資料が少ない清瀬市において、この時代を物語る資料として^{いたび}板碑があげられます。板碑は、鎌倉時代から安土桃山時代（13世紀から16世紀）にかけてつくられた供養塔の1つと言われ、死者の追善やあの世の安楽を願って、全国各地で造立されました。特に、東京都・埼玉県では、埼玉県の^{ながとろ}長瀬で産出された^{りよくでいへんがん}緑泥片岩を使った板碑が数多く見つかっています。

清瀬市内の板碑は、下宿内山遺跡から出土したものが大半です。また、年号が入っていたものは、1350年前後に集中します。

市内の板碑で珍しいものとして、博物館に展示されている文明十年（1478）銘のある月待信仰に伴う板碑があります。月待とは、ある特定の日^{ばんじ}に人々が集まり飲食などをし、一夜を明かす風習です。この月待板碑の中央には、蓮座に梵字で表した阿弥陀三尊^{あみださんぞん}を配しています。その上

には日月・天蓋^{てんがい}、梵字の下には三具足^{みつぐそく}が刻まれています。造立年号のほか、生前供養を表す「奉月待供養逆修」の造立趣旨、さらには「孫太郎・孫四郎…」など13名の造立者の名前が刻まれており、当地に暮らした人々の信仰を伝える貴重な歴史的資料といえます。



下宿内山遺跡出土月待板碑
(清瀬市指定文化財)

武蔵国西北部板碑増減年表

